

第464回日本泌尿器科学会北陸地方会

(2019年6月8日(土) 於 ホテル金沢)

傍糸球体細胞腫の1例：嶋田彩保子，多賀峰克，大江秀樹，福島正人，青木芳隆，伊藤秀明，横山 修（福井大），伊藤知美，今村好章（同病理），長嶋洋治，原田桜子（東京女子医大病理） [症例] 39歳，男性。健康診断の腹部エコーにて右腎腫瘍を指摘された。精査目的に当院総合診療部を受診し，造影CTにて右腎上極の腫瘍を指摘されたため，加療目的に当科紹介となった。精査の結果，腎細胞癌cT1bN0M0の診断で腹腔鏡下腎摘除術を行った。病理ではH-E染色のみでは診断困難であったため，免疫染色が行われ，その結果からは上皮性腫瘍や間葉系腫瘍，さらに悪性の可能性は否定的であった。他院にコンサルトしてreninとkathepsin Kの染色が陽性であり，傍糸球体細胞腫と診断された。[考察] 傍糸球体細胞腫には3種あり，本症例は高血圧や低カリウム血症を認めなかったことから，無症候性傍糸球体細胞腫と考えられた。

多発腎細胞癌と多発肺嚢胞を認めたBirt-Hogg-Dube症候群の1例：中川竜之介，浦田聡子，大筆光夫，宮城 徹，中嶋孝夫（石川県中） 症例は65歳，男性。熱中症にて前医を受診し，CTにて偶発的に左腎多発腫瘍および多発肺嚢胞を認めた。また患者の頸部には白色の粟粒大の丘疹を認めた。患者は腎腫瘍に対して開腹左腎摘出術を施行された。病理結果はhybrid oncocytic/chromophobe tumorおよび乳頭状腎細胞癌であった。また遺伝子学的検査にてFLCN遺伝子のExon11においてシトシン挿入によるnonsense変異を認めた。以上よりBirt-Hogg-Dube症候群（BHD症候群）と診断した。BHD症候群とは皮膚線維毛包腫をはじめとする皮膚病変，多発性肺嚢胞，腎腫瘍を3主徴とする常染色体優性遺伝疾患であり，FLCN遺伝子異常が原因とされている。BHD症候群において腎腫瘍は16～34％に発症するとされており，組織型はhybrid oncocytic/chromophobe tumorが最も多く，嫌色素性腎細胞癌，淡明型腎細胞癌，オンコサイトーマがこれに次ぐ。また本疾患は常染色体優性遺伝であり，遺伝カウンセリングを十分に行ったうえで遺伝子学的検査を行うべきである。

Whole Body MRIでびまん性骨転移を発見できた前立腺癌の1例：瀧澤佳樹，飯島将司，島田貴史，岩本大旭，八重樫 洋，川口昌平，野原隆弘，重原一慶，泉 浩二，角野佳史，溝上 敦（金沢大），吉田耕太郎（同放射線科） [症例] 66歳，男性。前立腺癌（GS：5+5=10，PSA：133 ng/ml，cT4N1M0 膀胱 左尿管浸潤 リンパ節転移）に対してCAB療法を開始し，その後FDG-PETCTで多発骨転移が指摘され，局所放射線療法を施行した。5カ月でPSA 3.92 ng/mlから322 ng/mlへの急激な上昇と，同時に白血球1,550/μl，赤血球194万/μl，血小板3.5万/μlと汎血球減少を来したため，精査の方針となった。骨シンチグラフィーでは汎血球減少を来するような骨転移の増悪は認められなかった。背景抑制全身拡散強調像（DWIBS）含むWhole Body MRIを施行したところ，骨シンチグラフィーでは発見しえなかった骨転移を発見することができた。[考察] 骨シンチグラフィーで集積を認めないような骨梁管型転移に対してWhole Body MRI（DWIBS）で骨転移を検出することできたと考えられる。[結語] Whole Body MRI（DWIBS）でびまん性骨転移を発見できた前立腺癌の1例を経験した。転移性骨腫瘍では有用な検査であると考えられた。

BCG膀胱内注入療法後の結核性精巣上体炎との鑑別が困難であった膀胱癌精巣上体転移の1例：西山直隆，坪井康真，菊島卓也，菱川裕一郎，安川 瞳，池端良紀，飯田裕朗，伊藤崇敏，渡部明彦，藤内靖喜，北村 寛（富山大） [症例] 68歳，男性。2014年に他院泌尿器科にて筋層非浸潤性膀胱癌に対して経尿道的膀胱腫瘍切除を施行し病理ではUC，G2，pT1であった。その後同院にてBCG膀胱内注入療法（BCG膀胱注）した。2015年大動脈破裂手術後より微熱，人工血管周囲腫瘍影，肺炎像を認めた。2016年4月喀痰培養より結核菌が検出され，播種性BCG感染症として抗結核薬投与開始（INH，RFP，EB）となった。その後，喀痰培養は陰性化するも抗結核薬は継続していた。2018年9月頃より両側陰嚢内容の腫脹，硬結を自覚。LVFX，CFPN-PIを投与するも症状改善しなかったため，2018年12月当科に紹介となった。2019年1月骨盤MRIにて両側精巣上体炎の疑

いとなり，同年2月BCGによる結核性精巣上体炎の診断にて両側精巣および精巣上体摘除を施行した。病理診断は両側精巣上体の転移性尿路上皮癌であった。CT検査にて左尿管癌，傍大動脈リンパ節転移を認め，現在ゲムシタビン・シスプラチンによる化学療法を施行中である。[考察] BCG膀胱注後に0.2～0.4％の症例に結核性精巣上体炎を来すことが報告されている。しかし尿路上皮癌が精巣および精巣上体に転移を来すことはきわめて稀である。われわれが調べた限りでは尿路上皮癌が精巣への転移を来した報告は8例認めるが，精巣上体への転移を来した症例の報告は認めない。文献的考察も含めて報告する。

緊急手術を施行した急性陰嚢症6例の検討：中野泰斗，角野佳史，岩本大旭，八重樫 洋，飯島将司，川口昌平，野原隆弘，重原一慶，泉 浩二，溝上 敦（金沢大） [目的] 急性陰嚢症は急激な陰嚢の疼痛，発赤，腫脹を来す疾患の総称である。特に精巣捻転症は，緊急手術を要する重要な疾患である。今回，当院にて2014年～2019年までに経験した急性陰嚢症にて緊急手術を施行した6例について検討した。[結果] 6例の内，1例は精巣垂捻転症，5例は精巣捻転症であった。5例の内，2例が精巣摘除を余儀なくされた。2例ともに比較的執刀までに時間を要した症例であり，血流障害の程度が強いものであったと考えられた。精巣垂捻転症の症例を除き，推定発症時間はすべて早朝で，気温の低い時期の発症が多かった。内側に回転している症例が多いという報告があるが，本検討では，外側に捻転している症例があり，用手整復はやはり推奨できないと考える。また，精巣捻転症後の造精機能障害について抗精子抗体（ASA）の関与が指摘されているが，いまだに造精機能障害に与える影響は不明であると考えられる。[結語] 当院で緊急手術を施行した急性陰嚢症の6例について，検討，報告した。精巣捻転症が疑われた場合，精巣温存のためには早急な診断と手術が重要と考えられた。

当院における尿道カテーテル関連尿路感染（CAUTI）の現状：上野 悟，高島三洋（JCHO 金沢），岩島さやか（同看護部） 2016年～2018年度の尿道カテーテル留置件数はそれぞれ661，801，881件と年々増加していた。しかし平均留置日数は8～9日間で減少傾向，中央値は3.0日と変化はなかった。例年留置症例の1割弱に尿培養検査が実施されていた。分離菌は大腸菌が最も多く全体の25.5％，このうちESBL産生大腸菌は全体の7.8％であったが大腸菌中では30％を占めていた。CAUTIと判断された件数は2016年度8件（発症率1.2），2017年度12件（同1.5），2018年度10件（同1.1）であり本邦の報告1.2，米国の報告1.4～1.5と相違はなかった。CAUTI例の平均カテーテル留置日数は25.5日，中央値15.5日で長期留置はCAUTI発症のリスクであると考えられる。

CTによる術前評価を用いたESWLの臨床的検討：國井建司郎，長谷部憲一，牛本千春子，井上慎也，中澤佑介，菅 幸大，森田展代，近沢逸平，田中達朗，宮澤克人（金沢医大） ESWLは尿管結石に対し確立された治療であるが，stone free（SF）とならない症例もある。単純CTで術前評価を行ったESWLの治療成績について検討した。[対象・方法] 2008年以降にCTで初期評価した新規ESWL患者533症例の内，治療後3カ月までに排石確認された尿管結石147症例を対象とした。SFに関与する因子を多変量解析を用いて評価した。[結果] 全体のstone free rate（SFR）は87.1％であった。U1，U3においては2017年EAUガイドラインと比較して良好な成績が得られた。多変量解析で結石体積500 mm²以上が優位にSFRを低下させる因子であった（p<0.05）。[結論] 単純CTによる尿管結石治療前検査は，治療選択において有益な検査であり，今後も十分な患者情報を取得し，適応を検討すべきと考えられた。

腎癌死亡症例の後方視的検討—進行期の腎癌治療に影響を与える因子の探索—：土山克樹，谷尾 信，小林久人，福島正人，青木芳隆，伊藤秀明，横山 修（福井大） [目的] 腎癌死亡症例を後方視的に検討し，進行期の治療（とくに薬物療法）や生存期間に影響を与える因子を探る。[方法] 2006年4月から2019年3月に腎癌により死亡し

た37例を後方視的に解析した。〔結果〕男性25例、女性12例。診断時 stage III 以下17例、stage IV 20例。薬物療法は32例に行われ、1次治療はサイトカイン13例、分子標的治療18例であった。薬物療法開始後の予後は診断時 stage IV 群が有意に短かった。1次治療内容による予後の有意差はなかったが、2次治療移行の逐次療法に移行できた群は有意に生存期間が長かった。〔考察〕1次治療施行期間、逐次療法の有無は生存期間に影響しえる。

当院におけるベムプロリズマブの使用経験：島 崇，神島泰樹，武澤雄太，町岡一顕，瀬戸 親（富山県中） 2018年4月～2019年3月までにベムプロリズマブを投与開始した尿路上皮癌19例を検討した。

平均年齢は72.8（62～84）で、男女比は15：4であった。転移までの出現期間は24.7カ月（0～127）で中央値は10カ月であった。ベムプロリズマブへの切り替え理由は病勢進行が10例で、他に腎機能低下などが含まれていた。全生存率は12カ月で62.3%であった。転移出現時点からの全生存率は約26カ月で50%であった。RECIST 評価しえた症例12例中5例（41.7%）に partial response を認めた。結果はKEYNOTE-045 試験の報告よりやや良好であった。有害事象として grade 2 以下の皮膚障害4例、食思不振2例、甲状腺機能低下2例を認めた。Grade 4 の肝障害を1例認め、顕微鏡的レベルの胆管障害の診断であった。また投与1カ月での死亡を2例認めたが、病勢進行によるものと考えられた。